松下幸之助の経営哲学と仏教思想（二）

――現代の企業経営に求められる倫理についての考察

水野隆徳

第二章　松下幸之助が到達した仏教的境地：ブッダの繁栄のための法と松下幸之助の経営哲学との類似性についての考察

企業不祥事の続発という憂慮すべき事態をみるとき、現代の企業社会が直面している大きな課題は、企業の経営倫理の確立である。本研究は、事業家、商売人でありながら、常に人間と社会と国家のあるべき姿を追求してやまなかった松下幸之助の経営哲学を仏教思想との関連から考察し、現代の企業社会における新しい経営倫理を探求しようとするものである。

自己、あるいは人類、宇宙を究極まで追求する人は、一様に哲学性・宗教性を帯び、同じような境地に到達しているように思われる。松下幸之助は、日本では戦後最も優れた経営者という高い評価を得ているが、自己の存在から親、祖先、人類、宇宙の存在を問いかけていく過程で、哲学性・宗教性を深め、ブッダと共通する理法を体得していった。

本章ではまず、一九六〇年代半ばに早くも松下幸之助の哲学性・宗教性を見抜いた米『ＬＩＦＥ』（ライフ）誌の見方と、幸之助が哲学的・宗教的思索を深めていった過程を考えてみる。

次いで、『大パリニッバーナ経』のブッダの言葉と松下幸之助の経営哲学の共通性を検討し、両者の教えが現代における新しい経営倫理の確立に貢献する道を考察することとする。

1．米誌が発見した松下幸之助の哲学性・宗教性

一人の和服姿の男性が、真白な小石の敷き詰められた庭園を思索にふけりながら散策している写真。そこから連想されるのは、哲学者、宗教家、神官、あるいは茶人のイメージであるが、この人こそ、パナソニックの創業者、松下幸之助なのである。

日本が高度成長と経済的繁栄の道を辿っていた最中、米『ライフ』誌は一九六四年九月一一日号で松下幸之助の特集記事を掲載した。その最初のページには幸之助の写真が掲げられ、

MEET MR. MATSUSHITA

Top Industrialist
Biggest Money-maker
Philosopher
Magazine Publisher
Best-selling Author

と記されている。[1] 視覚的には「Philosopher」（哲学者）としての松下幸之助を浮かび上がらせるに充分な構成である。

当時、米国で最大の発行部数を誇る『ライフ』誌が松下幸之助を特集した第一義的目的は、いうまでもなく、松下グループ（当時）を率いる経営者としての松下幸之助、最大の高額所得者としての松下幸之助であった。しかし『ライフ』誌が発見し、驚いたものは、哲学者としての松下幸之助であった。[2]

彼が京都に設立した研究所の庭園を和服姿で物思いにふけりながら散策している姿をみると、あたかも仏教僧のようにみえる。この人物こそ、日本で最も偉大なビジネスマン、松下幸之助なのである。

松下幸之助は福音の伝道師のようなアメリカ人が容易に理解できる要素をもっている。

『ライフ』誌は、この特集で鋭敏にも松下幸之助の二つの顔を描いている。

一つは、「経営者」としての顔、二つは「哲学者、思想家」としての顔である。

松下幸之助が日本で尊敬されているのは、いうまでもなくビジネスでの成功である。小学校を四年で中退し、丁稚奉公から社会生活を始めて、一代で巨大なパナソニックグループを築き上げた経営手腕は、立志伝中の人物として国民的尊敬を集めている。そのため松下幸之助論は、経営学からの視点が主体であり、「哲学性」や「宗教性」はあまり注目されていないのが実情である。

しかしながら松下幸之助の経営哲学には、深い思索から導かれた「哲学性」と、求道的精神に基づく「宗教性」を認めることができる。宗教と事業を車の両輪と考え、ビジネスと哲学の融合を唱えた松下幸之助の経営哲学は、資本主義の最先進国である米国のジャーナリズムにとっては全く新しい発見であった。『ライフ』誌は、その驚きを次のように記している。[3]

松下幸之助のビジネスと哲学との不思議な融合は、西欧人の目には大変な驚きと映る。

『ライフ』誌が大きな関心をもった松下幸之助のもう一つの側面は、松下幸之助が経営者でありながら「人類の進歩・向上」に目を向けていたことである。一般的には、企業経営者の最大の関心事は「利潤」にある。それは、米国資本主義の根底をなすものといえる。ところが松下幸之助は、深い思索の中から生まれた人間観、社会観、国家観を

説いてやまなかった。松下幸之助が設立したＰＨＰ研究所は、「Peace and Happiness through Prosperity」の頭文字をとったものである。人類の平和と幸福と繁栄を希求するという独自の哲学を展開する松下幸之助は、米国のジャーナリズムにとっては「Evangelist」（福音の伝道師）とも映ったのである。

日本は「仏教国」とも「無宗教の国」ともいわれている。矛盾しているようであるが、いずれにしても、「Philosopher」、あるいは「Evangelist」としての松下幸之助は、宗教国家である米国のジャーナリズムにこそみえてきた、といえるのである。

2. 宇宙の根源力に到達

それでは、松下幸之助はどのようにして哲学性・宗教性を身につけていったのであろうか。それは幸之助が、自分自身について、人間について、社会、国家について、そして宇宙について、常に〝なぜ〟という問いかけをもち、納得できなければさらに〝なぜ、なぜ〟と、究極のところまで問いつめていったからである。『道をひらく』には、次のように書かれている。[4]

こどもの心は素直である。だからわからぬことがあればすぐに問う。〝なぜ、なぜ〟と。

こどもは一生懸命である。熱心である。だから与えられた答を、自分でも懸命に考える。考えて納得がゆかなければ、どこまでも問いかえす。〝なぜ、なぜ〟と。

こどもの心には私心がない。とらわれがない。いいものはいいし、わるいものはわるい。だから思わぬものごとの本質をつくことがしばしばある。こどもはこうして成長する。〝なぜ〟と問うて、それを教えられて、その教えを素直に自分で考えて、さらに〝なぜ〟と問いかえして、そして日一日と成長してゆくのである。

大人もまた同じである。日に新たであるためには、いつも〝なぜ〟と問わねばならぬ。そしてその答を、自分でも考え、また他にも教えを求める。素直で私心なく、熱心で一生懸命ならば、〝なぜ〟と問うタネは随処にある。それを見失って、きょうはきのうの如く、あすもきょうの如く、十年一日の如き形式に堕したとき、その人の進歩はとまる。社会の進歩もとまる。

繁栄は〝なぜ〟と問うところから生まれてくるのである。

ＰＨＰは、松下幸之助が、一九四六年頃の退廃した世相や言語に絶する悲惨な状況が〝なぜ〟起こったのか、強い疑問をもったところから出発している。

それを〝なぜ、なぜ〟と突きつめていった結果、「人間には本質的に繁栄と平和と幸福が与えられているものである。これを実現する道を研究しよう」という結論に到達したのである。

人生に対する松下幸之助の姿勢について、彼の下で二二年間仕事をし、直接あるいは電話で毎日のように接していた江口克彦は、『心はいつもここにある』の中で次のように記している。[5]

松下の姿を見続けてきた私には松下幸之助という人は「考える人」というより「考えぬく人」であったように思う。どのような課題も松下の頭の中では「なぜ」が執拗に繰り返されていた。たとえば自分はどうして存在しているのか、誰のおかげなのか。それは両親が自分を誕生させてくれたからだということになる。誰でもこういうことは考えるもので、そしてたいていそういう答になってそれで納得ということになるが、松下の場合はそこで終わらない。それではその両親はどうして存在したのか。それはそのまた両親が存在したからだ。ならばそのまた両親はどうなのか。

松下の執拗な「なぜの繰り返し作業」は人間の始祖に行き当たる。しかし松下はそれでもなお、「なぜ」と問い続ける。人間の始祖は、ではなぜ存在したのか。考えぬいた松下はここで「宇宙根源」という概念を創り出す。宇宙にあるすべてのものはことごとく宇宙の根源から、それが有する力によって生ぜしめられたものである。宇宙自体も太陽も地球も山川草木もこの宇宙根源力によって存在せしめられている。そしてそれは人間も例外ではない。人間の始祖も宇宙の根源から誕生したものである。とすれば自分の存在は宇宙根源と結びついていることになる。そこで松下は、自分という存在は宇宙の根源力によって誕生し、それによって生かされていることを実感する。

ここに示されているように、松下幸之助は〝なぜ〟を繰り返す作業の過程で、

「自分の存在→両親の存在→人類の存在→太陽・地球・山川草木の存在→宇宙の根源」

に向かって思考を深めていった。そして遂には、自分は宇宙の根源力によって生かされているという、いわば仏教的悟りの境地に到達したのである。江口のこの指摘は、松下幸之助の経営哲学を理解する上できわめて重要である。というのは、松下幸之助は、自分や、人間、宇宙の存在について観察し、根源的な思索を繰り返す過程から、独自の人間観、社会観、国家観を形成していったからである。彼の経営哲学も、道徳・倫理についての考え方も、宇宙の根源力と密接不可分の関係にある。

3. 自然の理法に従う

そこでこの宇宙の根源について、『松下幸之助　散策・哲学の庭』から引用してみる。[6]

それであるとき考えた。これは自分をこういうふうに存在させてくれたものに感謝せんといかんと。誰がわしを存在させたんか。考えたら、それは両親やと。これはわしの両親に感謝せんといかんとそう思った。しかし、それではわしの両親はどうして存在したのやろうか、とすぐ思った。それはそのまた両親からやと。（中略）それではその両親は、ということで、どんどん考えていったら、つい

には人間の、始祖になった。わしははじめての人間から連綿と血がつながっておるということに思いいたった。

わしだけではない。人間みんな始祖とつながっておる。とすると、今日わしがこうして存在しておることに対しては、両親やそのまた両親に感謝せんといかんということはもちろんのことやけど、はじめての人間、始祖やな、始祖に感謝せんといかんと。そう思ったんや。

ところがふと、それでははじめての人間はどこから生まれてきたのか、と思ったんや。いろいろ考えたけど、今度はそう簡単に答えは出てこん。ずいぶんとあれやこれやと思い巡らした結果、人間は宇宙の根源から、その根源のもつ力によって生み出されたんやと、うん、突然そうひらめいた。

これをみると、執拗な「なぜの繰り返し作業」によって幸之助の思索が深まっていく過程をリアルに実感することができる。松下幸之助は、この宇宙の根源力には一つの決まりがあると考え、それを「自然の理法」と名づけた。

幸之助によれば、物事はこの自然の理法に則っていればうまくゆくようになっている。企業の経営も同じである。自然の理法に素直に従っていれば、成功の道が開けてくる。人類は、宇宙の動きに順応した正しい人間観を確立することによって、平和と幸福と繁栄を実現することができるのである。

4. ブッダの徹底観察・徹底考察：瞑想により悟りに到達

既述のように松下幸之助は、「なぜの繰り返し作業」によって宇宙の根源力に到達した。そこに到るには、先の江口克彦『心はいつもここにある』の書名に示されているように、松下幸之助は、

「心はいつもここにある」

という姿勢を常にもち続け、自分、心、自然、宇宙を観察していた。彼の思考、ならびに哲学の深さはこの深い観察力から生まれている。

この松下幸之助の「心のもち方」は、ブッダが修行僧に説いた教えと全く同じである。最後の旅に出たブッダは、ヴェーサーリーで修行僧を前に次のように諭した。[7]

「身体を観察し（中略）感受を観察し（中略）心を観察し（中略）諸々の事象を観察し、熱心に、よく気をつけて、この世における貪欲や憂いを除去していなさい」

「身体」「感受」「心」「諸々の事象」の観察とは、六根・六境・六識、すなわち一八界を観察することであり、ブッダは、常にここに「よく気をつけていなさい」と語っているのである。

そして、この「よく気をつけている」ということについて、ブッダは、修行僧に次のように説明している。[8]

「修行僧たちよ。ここで、修行僧は、出て行くときにも、もどるときにも、よく気をつけていて、前を見るときにも、後を見るときにも、よく気をつけていて、腕を屈するときにも、伸ばすときにも、よく気をつけている。大衣や衣鉢をとるときにも、よく気をつけている。食し、飲み、噛み、味わうときにも、よく気をつけている。大小便をなすときにも、よく気をつけている。行き、住し、坐し、眠り、めざめ、語り、沈黙しているときにも、よく気をつけている。修行僧たちよ。修行僧はこのように実によく気をつけているのである。修行僧たちよ。修行僧は、このように念じて、よく気をつけておれ。これが、お前たちに説くわたしたちの教えである」

ここでブッダが繰り返し説いている「よく気をつけている」とは、松下幸之助の「心のもち方」と同じことである。人間は、万事に、よく気をつけ、心を置くことによって行為が真剣になり、思考に深みが加わってくる。哲学的・宗教的・倫理的になる。

ブッダにとって「観察」が、きわめて重要な意義をもっていたことは、いうまでもないことである。宮元啓一博士は『仏教の倫理思想』の中で次のように記している。[9]

ゴータマ・ブッダは、思考停止を目指す瞑想の道を捨て、次には苦行の道をも捨て、菩提樹の下でみずから新たに開発した徹底観察、徹底考察を行う瞑想（精神集中、禅定）に入り、ついに「なすべきことはなし終えた」という実感を味わい、すべての疑念の闇から解き放たれ、目覚めた人（ブッダ、仏）となったのです。三十五歳のときでした。

ブッダは、瞑想、つまり精神を集中することによって禅定に入り、徹底観察・徹底考察を行うことによってすべての疑念から解放され、悟りの境地に到達したのである。

これは、松下幸之助が、何事につけても、〝なぜ〟という疑問をもち、「なぜの繰り返し作業」によって宇宙の根源力に到達したのと同じである。

ブッダ、松下幸之助がこのような宗教的・哲学的境地に達するには、常人の及ばない努力・精進が必要であった。

現代の若手経営者、とくにベンチャー起業家やＩＴ企業経営者の欠点は、あまりにも短期間で脚光を浴びてしまうことである。スピード、スピードの社会に浸っているために、物事をじっくりと観察・思索し、人間観、社会観、国家観を涵養していこうという問題意識も、余裕もないのである。そのために思考が単純・浅薄で、哲学性・宗教性・倫理性に欠けている。哲学性がないということは深みがないこと、宗教性がないということは倫理性の欠如につながっている。

現代の企業社会で不祥事が発生している根本的原因はここにある。百～二百年の伝統をもつ名門企業ですらこの風潮に流されている。

5. ブッダも繁栄、幸福、平和を説いた

(1) ブッダ最後の旅の始まり

仏教は通常、禁欲的な思想と考えられている。仏教の解説書には、入門書でさえも、三法印、四諦、八正道、無我、縁起説など難しい内容が説かれている。しかしながら原始仏教の経典からは、ブッダの生き生きとした姿や、新鮮な仏教精神の息吹を感じ取ることができる。そこには、基本的な仏教思想とともに、「繁栄」「幸福」「資産家」というような、仏教の禁欲主義に反する言葉もあらわれてくるのである。

ブッダは、三五歳で悟りを開いてから四五年間、ガンガーラ河（ガンジス河）沿岸の中インド各地を遊行し、悟りの境地を布教して歩いた。そして、八〇歳になって最後の旅に出て、その記録が『大パリニッバーナ経』として、今日に残されている。我々は、ブッダの新鮮な言葉や生の姿、ニルヴァーナ（寂滅）の境地などを、このお経を通して知ることができる。

ブッダ最後の旅は、マガダ国の首都ラージャグリハ（王舎城）にある鷲の峰（霊鷲山）から始まる。『大パリニッバーナ経』もここから幕を開くのである。

当時のマガダ国王アジャータサットゥ（阿闍世）は、隣の商業都市国家ヴァッジ族の領土を侵略しようとし、この計画についてブッダの意見を聞くため、バラモン出身の大臣ヴァッサカーラをブッダのもとに派遣した。

『大パリニッバーナ経』は、ヴァッサカーラが、アジャータサットゥ国王の意図をブッダに伝える場面から始まる。これに対してブッダは、弟子のアーナンダを通して、ヴァッジ人が繁栄し、衰亡しないための次の「七つの法」を説いた。

(2) 繁栄のための七つの法

〈第一の法〉

「アーナンダよ。ヴァッジ人は、しばしば会議を開き、会議には多くの人々が参集する、ということをお前は聞いたか？」

「尊い方よ。ヴァッジ人は、しばしば会議を開き、会議には多くの人々が参集する、ということを、わたくしは聞きました。」

「それでは、アーナンダよ。ヴァッジ人が、しばしば会議を開き、会議には多くの人々が参集する間は、ヴァッジ人には繁栄が期待され、衰亡は無いであろう。[10]」

ここでブッダはまず、「しばしば会議を開き、会議には多くの人々が参集する」というヴァッジ人の国家の運営方法にふれて、これが守られている間はヴァッジ人に繁栄が期待され、衰亡はないと説いている。これが、ヴァッジ人が繁栄し、衰亡しないための第一の法である。

ブッダは、この後、同じような対話で以下の六つの法を説いてゆくのである。[11]

〈第二の法〉

「ヴァッジ人が、協同して集合し、協同して行動し、協同してヴァッジ族として為すべきことを為す間は、ヴァッジ人には繁栄が期待され、衰亡は無いであろう。」

〈第三の法〉

「ヴァッジ人が、未来の世にも、未だ定められていないことを定めず、すでに定められたことを破らず、往昔に定められたヴァッジ人の旧来の法に従って行動する間は、ヴァッジ人には繁栄が期待され、衰亡は無いであろう。」

〈第四の法〉

「ヴァッジ人が、ヴァッジ族のうちの古老を敬い、尊び、崇め、もてなし、そうして彼らの言を聴くべきものと思っている間は、ヴァッジ人には繁栄が期待され、衰亡は無いであろう。」

〈第五の法〉

「ヴァッジ人が、良家の婦女・童女を暴力で連れ出し拘え留めることを為さない間は、ヴァッジ人には繁栄が期待され、衰亡は無いであろう。」

〈第六の法〉

「ヴァッジ人が（都市の）内外のヴァッジ人のヴァッジ霊域を敬い、尊び、崇め、支持し、そうして以前に与えられ、以前に為されたる、法に適ったかれらの供物を廃することがない間は、ヴァッジ人には繁栄が期待され、衰亡は無いであろう。」

〈第七の法〉

「ヴァッジ人が真人たちに、正当の保護と防禦と支持とを与えてよく備え、未だ来らざる真人たちが、この領土に到来するであろうことを、またすでに来た真人たちが、領土のうちに安らかに住まうであろうことをねがう間は、ヴァッジ人には繁栄が期待され、衰亡は無いであろう。」

既述のように、マガダ国王アジャータサットゥが大臣のヴァッサカーラをブッダのもとに派遣した意図は、ヴァッジ国を侵略することについてのブッダの意見を求めるためであった。これに対してブッダは、「七つの法を守っていればヴァッジ人は繁栄を続けるであろう」と説いた。アジャータサットゥ国王の質問に直接答えずに、ヴァッジ国がよく治められている事実を示すことによって、間接的に侵略の非を説いたのである。

この経緯から読み取れるように、ブッダは、アジャータサットゥ国王によるヴァッジ国侵略の意図に否定的見解を示した。侵略ではなく、平和を願う気持ちを表現したのである。ブッダはまた、七つの法によって繁栄の大切さを説いた。民族・国が繁栄していれば、他国から侵略を受けることもなく、平和が維持される、という考え方である。これは、前号で記した「繁栄によって平和と幸福を実現する」という松

下幸之助の考え方と通じるものである。

（3）世俗社会の変革を希求

ブッダ在世中の古代インドは、多数の群小国家の激しい対立抗争を経て一六の大国が支配する時代になっていた。その中でも、マガダ国とコーサラ国は二大強国として覇を競っていた。中村元博士は『古代インド』の中で、当時のインドの政治状況を次のように記している。[12]

原始仏教聖典のうちには、しばしば当時の大国を「十六大国」として総称してその名を挙げているが、その中でもとくに強力優勢であったのは、コーサラ、マガダ、アヴァンティ、ヴァンサの四国であった。そして、この四国のうちでもコーサラ国とマガダ国のことは、仏教およびジャイナ教の聖典に、とくに多くしるされている。それは、この両宗教が最初にこの地方で興起したからである。じっさいにも、この時代のもっとも重要な国家はコーサラとマガダであった。この両国は当時のインドの政治的中心であったばかりでなく、多くの新しい思想や宗教の興る母胎となった。

こういう国家間の抗争にブッダがどう対処したのか、マガダ国を例にとってみよう。

ブッダの時代、マガダ国のビンビサーラ国王は、ブッダに面会し、精強な軍隊と財を提供することを申し出た。ブッダはこれを断わったが、ビンビサーラはブッダに帰依して、仏教がマガダ国に拡がるもとをつくった。保坂俊司の『国家と宗教』によれば、ブッダとビンビサーラとの関係は次のようになる。[13]

初期の仏教僧は、国家権力との交わりを極力避けていたようである。つまり「比丘は、国事の縁を論ずることなかれ。この論によっては、滅尽涅槃の処に至ることを得ず」（『雑阿含経』）と教えている。

しかし、一方でゴータマ・ブッダが、王族の出身であったように、権力者の帰依者も少なくなかった。例えばビンビサーラ王などは、ゴータマ・ブッダのよき理解者であった。したがって仏教は、全く世俗権力との関係を拒否した世捨て人集団ではなく、適度な距離を置きつつ世俗社会の変革をも希求した集団であったと言い得るであろう。

この保坂の指摘は、次のアジャータサットゥ国王についても当てはまる。アジャータサットゥは、父のビンビサーラ国王を幽閉・殺害して王位を簒奪し、周辺国家を侵略しようとしていた野心的な権力主義者であった。そのアジャータサットゥ国王がヴァッジ国侵略の意図について意見を求めてきたのに対して、ブッダは申し出を断わることなく、また侵略に関して賛否の態度を明らかにすることもしなかった。既述のようにブッダは、「繁栄のための七つの法」を説くことによって、侵略を思いとどまらせようとしたのである。この七つの法をみると、ブッダが国家・民族など世俗社会についても関心と見識をもっていたことがうかがわれる。

保坂がいうように、ブッダは、世俗権力を拒否した世捨て人ではなかった。世俗権力と適度な距離を置きつつ世俗社会の変革を希求していたのである。

このブッダの世俗社会に対する姿勢は、これから説明していく仏教と経済、仏教と経営、仏教と経営倫理との関係を考えていく上でもきわめて重要である。

（4）目標は万人のしあわせに

『大パリニッバーナ経』の中でブッダは、「繁栄」とか、「幸福」「資産家」というような世俗的な事柄を説いている。それは、仏教を禁欲主義と考えている一般論からみると違和感を覚えるが、世俗社会に対するブッダの姿勢を反映しているのである。原始仏教と世俗社会との関係もこれによって説明ができる。中村元博士は、原始仏教においては、経済・国家の目標は万人のしあわせのためにある、としている。[14]

目標は万人のしあわせに――経済・国家

原始仏教によると、家長たる者は生業に勤勉に従事すべきであるという。人が戒律をたもって、あたかもハチが食物を集めるように働いたならば、財はおのずから集積するであろう。あたかもアリの塚の高められるようなものである。しかしながら、自分が財貨を一方的に獲得するのみでただ自分のもとに保持しておくことは無意義である。自分が用いると同時に、他人にも享受させ、有効に用いねばならない。「財産多く、金銀あり、食物を有する人が独り美味を食する」ことは堕落の門である、といっていましめている。

国家の問題に関しては、国王は、元来、人民の選出したものであると解していた。世界が成立してのちに、人民のあいだに略奪や盗みが起こったので、それを防ごうとして、人民たちは集まって評議し、衆の中から一人の有徳の人を選び出して、めいめいの収穫の六分の一を出し合い、この人を雇って防護させたのが、国王の起源であるという。「六分の一」というのは当時の税率である。

ところが、当時の国王はきわめて強暴であり、権力をもって民衆を圧迫していた。仏典の中ではしばしば、国王の難と盗賊の難とを併挙している。そこで仏教は人々ができるだけ国王の支配のもとから遠ざかって、自分らだけで完全な理想的社会（サンガ）をつくり出そうとした。しかし国家を全然無視して社会理想を実現するということは、当時のインドにおいても不可能であった。そこで仏教は国家のあるべきすがた（ダルマ）を説いたのであるが、それは後世のアショーカ王によって実際政治のうちに具現されることになった。

このようにみてくると、松下幸之助の「繁栄を通しての平和と幸福の実現」と、ブッダの説いた繁栄と幸福、平和が全く共通の考え方の上に成り立っていることがわかる。

中村博士が、「仏教は国家のあるべきすがた（ダルマ）を説いた」と指摘していることも注目に値する。そのダルマとは、「人間のあるべきすがた」でもある。また現代社会でいえば、「企業経営者のあるべきすがた」でもある。「万物のあるべきすがた」といえる。

企業不祥事を含め現代社会の病根は、企業、社会、国家がそれぞれのあるべき姿を見失っているところに起因している。ブッダの説いたダルマ（法）には、万物、万人が自己本来の姿を見つめ直すべきである、という教えが含まれているように思われる（ダルマについては後述）。

6.〈繁栄のための第一の法〉

（1）会議によって万事を決する

ブッダが弟子のアーナンダを通してアジャータサットゥ国王に説いた「繁栄のための七つの法」の中には、現代の企業社会の倫理にも取り入れることができる普遍性をもった内容が含まれている。

一つは、「しばしば会議を開き、会議には多くの人々が参集する」という第一の法である。これは、現代流に翻訳すると、民主主義の根本原則ともいうべきものである。

ブッダの時代、国家の政治形態としては、専制国家と共和制の二つがあった。アジャータサットゥ国王が支配するマガダ国や、プロディヨータ国王のアヴァンティ国は、専制国家であり、シャーキヤ族やヴァッジ族の国は、共和制をとっていた。ブッダが生まれたシャーキヤ族と、アジャータサットゥ国王が侵略しようとしていたヴァッジ族については、中村元博士が次のように記している。[15]

そのほかに一群の貴族制共和国があった。マガダ国の北にあったリッチャヴィ族が商業都市ヴァイシャーリーを中心にして共和制を発展させたし、またコーサラ国の東北方に居住したシャーキヤ族、マッラ族なども貴族による共和制をとっていた。

ところでこの時代の新しい宗教が共和制の国々の中から出現したことは注目さるべきである。ジャイナ教の開祖マハーヴィーラはヴァイシャーリー市の近郊の出身であり、仏教の開祖シャカ（ゴータマ・ブッダ）は同じく共和制のシャーキヤ族出身である。

さらに『ブッダ最後の旅』には次の記述がある。[16]

ヴァッジ族は当時都市国家を成立させ、共和制によって政治を行ない、会議によって万事を議決し、商工業を盛んに営み、派手な服装を好んでいた。この国の首都は商業都市ヴェーサーリーであった。アジャータサットゥ王はこのヴァッジ族を征服したならば、ガンジス河北岸一帯にわたって広大な領域と夥しい富を手に入れることができると考えていたのである。

シャーキヤ族もヴァッジ族も、共和制をとっていたと記されている。ブッダは、ヴァッジ人がしばしば会議を開き、会議に多くの人々が参集する間は、繁栄が期待され、衰亡することはないであろうと説いた。このブッダの考えが、シャーキヤ族の王子としての経験に基づくものであろうことは容易に推測される。

注目すべきは、ブッダが、会議によって万事を決する方式を望まし

い政治形態と考えていたことであり、ブッダが国家の経営に関する経綸をもっていたことである。

ブッダは、マガダ国の大臣ヴァッサカーラが立ち去った後すぐに、アーナンダに告げて、王舎城の近くに住んでいるすべての修行僧を集めさせ、修行僧たち（僧団）が繁栄し、衰亡を来さないための七つの法を説いた。それは、アジャータサットゥ国王に説いた内容とほぼ同じである。[17]

その第一の法の中で説いた「しばしば会議を開」くというのは、会議によって万事を決するということである。また、「会議には多くの人々が参集する」というのは、多くの人の知恵を集めるということ、衆知を集めるということである。

これは現代社会でいえば、国家、企業などあらゆる組織の経営に当てはまることである。近年の企業不祥事をみると、ほぼ例外なく、ワンマン経営とか、一族経営の企業で起きている。つまり、多くの人の知識や経験、価値判断が働かないシステムの中で起きているのである。

・会議によって万事を決する

・衆知を集める

このブッダの教えは、現代の企業社会にも生きる大切な教えといえる。

（2）衆知を集めて高い叡知を得る

ブッダが、繁栄のための法として「会議には多くの人々が参集する」ことを挙げたように、松下幸之助も「衆知を集める」ということを常に説いていた。これは、幸之助の最も重要な経営哲学をなしている。『人間を考える――新しい人間観の提唱・真の人間道を求めて』には、繰り返し「衆知を集める」という考えが示されている。例えば、次の部分である。[18]

人間がその偉大な本質を正しく発揮し、幸せを逐次高めていくためには、何よりも多くの人びとの知恵を集めていかなくてはなりません。そして、そこに個々の知恵を越えた高い衆知、すなわちすぐれた知恵を生みだし、それによって正しい道を求めていくことが大切なのです。

人間が偉大であるという特性を持っていることの真の意味は、まさにここにあるわけです。すべての人の知恵が集められ、融合調和されて高い叡知となる時、人間は自然の理法を解明し、すべての物事の善悪を正しく判断し、誤りなく是非を定め、それによって王者として万物を支配活用して、調和ある繁栄を生みだすことができるのです。まさに衆知こそ、人間の偉大さを発揮させる最大の力だといわなくてはなりません。

松下幸之助は長い間にわたって、民族と民族、国と国との競争心、闘争心、物欲、権勢欲、人間同士の殺戮、世界大戦、貧困、飢餓など、人類の歴史における諸問題を考察していく過程で、はたして人間とはこのように常に弱く愚かなものであろうか、それが人間の本質であろうか、と疑問をもつようになった。そしてさらに思索を重ねて得た結

論が、人間の本質に関する次の認識である。[19]

人間の本質はもっとほかにある、人間は本来もっとすぐれたものである、調和ある繁栄、平和、幸福を実現し得るものである

この「繁栄、平和、幸福を実現」するために人間は、「すべての人の知恵」を集めて、それを「高い叡知」にまで融合・調和させていかなければならない。人間が物事の善悪や是非についての判断を誤るのは、人間の知恵が叡知にまで高まっていないからである。人類の歴史で繰り返し引き起こされる戦争も、貧困も、不幸も、これによって説明できる。

人間が叡知に到達すれば、物事の善悪が正しく判断できるようになる。是非の判断も間違いなくできるようになる。

松下幸之助の思考の深さは、知恵が今の我々の時代にとどまらないところにある。幸之助は衆知について、次のように続けている。

この衆知というものは、大きく考えれば、過去、現在を通じてのすべての人間の知恵ということになります。釈迦、キリストのような先哲諸聖、さらにはそれ以前の人間発生以来この世に存在したあらゆる先人、そして今日に生きるすべての人びとの知恵ということです。[20]

こういった先哲諸聖や宗教の尊い教えに帰依し、それを生かし、また活用することによって素直な心になることも意義ある方法だと思います。だから、宗教は本来、人間が真の王者であることをさとし、その処し方を教え導く、きわめて尊く重要なものであるといえましょう。[21]

ここで明らかなように、松下幸之助の衆知とは、人類が誕生して以来の人間の知恵であり、釈迦などの先哲諸聖や宗教の教えであることがわかる。こういう知恵こそが真の叡知であり、人間社会の道徳・倫理の根本をなすべきものである。

佛教の修行は種々複雑となつて居るが、其中心を取れば、全く智を磨くことである。[22]

宇井伯壽博士が『佛教汎論』の中でこう指摘しているほど、智慧は仏教思想上、重要な位置を占めている。

（3）ブッダの智慧

ブッダも、ニルヴァーナに入る前、法に関する講話を次のように締めくくっている。そこには「知慧」の言葉がみられる。[23]

戒律とはこれこれである。精神統一とはこれこれである。知慧とはこれこれである。戒律とともに修養された精神統一は、大いなる果報をもたらし、大いなる功徳がある。精神統一とともに修養され

た知慧は、大いなる果報をもたらし、大いなる功徳がある。知慧とともに修養された心は、諸々の汚れ、すなわち欲望の汚れ、生存の汚れ、見解の汚れ、無明の汚れから完全に解脱する

この中で、「戒律」という言葉が二回、「精神統一」という言葉が三回、「知慧」という言葉が三回使われているが、戒律をもって精神統一を修養し、精神統一をもって知慧を修養し、知慧をもって心を修養する流れになっている。ブッダの心は知慧によって得られるのである。『大パリニッバーナ経』には、これと全く同じ内容が五回にわたって記されている。「戒律―精神統一―知慧」は、ブッダの教えの根本をなしていた。そして仏教においては、次にみられるようにブッダそのものが智慧の体現者なのである。[24]

佛　佛陀の略。又、佛陀、浮陀、浮圖、浮頭、勃陀、勃馱、部陀、母陀、沒陀。覺者又は智者と譯す

また宇井伯壽博士は、ブッダを次のように記している。

抽象的にいへば、佛陀は智慧の具體化、慈悲の聚成者に外ならぬのである。[25]

佛陀其ものは智慧と慈悲とが人間の形に現はれたものに外ならないから、佛陀の一生は衆生の教化救濟のみであつたと認められて居る。[26]

ブッダの人生は、この智慧を覚知し、それを弟子や一般の民衆に説くための一生であった、といえるのである。

ブッダ滅後、ブッダの教えは仏教思想として体系化されていくが、そこでも智慧は重要な部分を占めている。例えば、

・三学――戒・定・慧
・十智――世俗智・法智・類智・苦智・集智・滅智・道智・他人智・盡智・無心智
・五根五力――信・精進・念・禅定・智慧
・六波羅蜜――布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧
・般若の智慧

このようにみてくると、宇井博士が指摘した「智を磨く」という修行は、企業倫理の面からも非常に意味のあることなのである。

もう一つ企業倫理の面からみると、不祥事は、ブッダが説いた「欲望の汚れ」「生存の汚れ」「見解の汚れ」「無明の汚れ」に起因するものといえる。現代の企業社会が、ブッダの「智慧」と松下幸之助の「叡知」から学ぶ意義はここにある。

7.〈繁栄のための第二の法〉

(1) 共同生活の行動規範：協同の精神

ブッダが説いた繁栄のための第二の法も、企業倫理を考察する上で

示唆を与えるものである。第二の法とは、

「ヴァッジ人が、協同して集合し、協同して行動し、協同してヴァッジ族として為すべきことを為す間は、ヴァッジ人には繁栄が期待され、衰亡は無いであろう」

というものである。

人間は有史以来、家族、氏族、部族、民族、国家など、さまざまな形態の共同生活を営んで生きている。ブッダの教団、そして現代の企業も、人間の共同生活の一つの形態である。

ブッダは、ヴァッジ人（族）が何事につけても協同している間は、ヴァッジ人に繁栄がもたらされるであろうと説いた。

また、修行僧たちを前にしての講話でも、修行僧が何事につけても協同している間は、修行僧に繁栄がもたらされるであろうと説いた。これは、ブッダ滅後、教団が分裂していった歴史に照らしてみると、誠に意味深い講話といえる。

人間は、自我に執着するところから、争いや闘争、戦争が生まれる。ブッダは、人間の本質に関する深い考察から「自我を捨てよ」と説法したのである。共同生活において自我がぶつかり合っているところでは、繁栄も、平和も、幸福も、実現できない。それ故にブッダは、「協同」の必要性を説いたのである。

（2）調和の思想

協同して行動し、協同して為すべきことを為すためには、対立ではなく、協調・調和が求められる。

松下幸之助は、繁栄のためには「調和」の思想が必要であることを常に強調していた。『ＰＨＰのことば』の「調和の思想」には、次のように記されている。[27]

昨今、私たちの社会にいろいろの問題が起こっているなかで、もっとも顕著なことは、人と人とがお互いに相争い、そのために多くのものが失われていることだと思います。そのわけを考えてみますと、各自の思想や主張についてこれが絶対に正しく、これのみが真理なのだと考えるところから起こってくるように思われるのであります。おのおのの主義主張はたとえそれが正しいものであるとしても、往々、真理の一面あるいは一部分にすぎないことが多いのであります。

松下幸之助がこれを記した一九四八年六月当時、日本は戦後の大混乱期であった。資本主義と社会主義、米国とソ連、自由主義陣営と共産主義陣営の対立が激化の一途を辿っていた時期である。その最中に松下幸之助は、さらに調和の思想に基づいて、社会主義と資本主義について、次のような考えを示している。[28]

社会主義にしても、資本主義にしても、それぞれ、活かされねばならない良い面、すなわち、一つの真理をもっているのであります。これをお互いの生活の上に活かし、お互いに融合され、調和されてこそ絶えざる進歩と発展がもたらされるのであります。それは、大

きな宇宙の真理の一部が社会主義や資本主義の中にあらわれたと考えるべきであろうと思います。

社会主義に一部の真理を認める松下幸之助の思想は、当時の経営者としては異例のことといえる。松下グループの企業は、資本家と労働者の対立が激しくなる中で労使協調路線をとったことで知られている。

松下幸之助は、さらに宗教についても次のように語っている。[29]

一つの宗教に帰依した人が安心立命の心境を得て、平和な生活をうち建てるのは立派な行ないでありますが、そのために他の宗教を誹謗し、自分の見解を強制するようなことであっては、世間を乱し、人心を惑わして、平和を目指すべき宗教がかえって争いの基となるおそれもあります。宇宙の真理というのは、決してそのような小さなものではないと思うのであります。

松下幸之助の思考がいかに柔軟であったか、また人間としていかに包容力があったかがうかがえるのである。

ブッダに立ち返ってみると、ブッダの時代は、部族間、国家間の対立・抗争は熾烈であった。部族内部、国家内部での対立・抗争も激しかった。新しい階級が台頭し、バラモンやクシャトリアなどの支配勢力に挑戦していた。宗教界、思想界でも、バラモンに対抗する新しい宗教・思想が生まれていた。そういう時代背景の下で、ブッダは、大きな包容力をもち、平和に徹した教えを説いた宗教家であった。ヴァッジ人の「協同行動」を高く評価し、修行僧には「協同」の重要性を講話したのである。

協同とは、協調・調和である。現代の企業社会をみると、経営者が協調・調和を重んじている企業と独断専行型の企業の間には、経営に大きな違いがあらわれる。先に私は、不祥事を避けるための方策として「衆知を集める」ことの重要性に言及したが、協調・調和の思想は、衆知と表裏一体をなすものであり、人間の共同生活の規範をなすべきものといえる。

聖徳太子の一七条憲法の最後の条には、

「大事は独断すべからず、必ず衆とともに論ずべし」

とある。まさにこの精神である。これが人間の共同生活の規範になっている限りにおいては、個人であれ、企業、社会、国家、さらには世界共同体であっても、行動に誤りなきを期することができる。

8.〈繁栄のための第三の法〉

（1）法を守り、法に従って行動する

ブッダが説いた繁栄のための第三の法は、次のようなものである。

「ヴァッジ人が、未来の世にも、未だ定められていないことを定めず、すでに定められたことを破らず、往昔に定められたヴァッジ人の旧来の法に従って行動する間は、ヴァッジ人には繁栄が期待され、衰亡は無いであろう」

この「法」とは、ヴァッジ人の法というにとどまらず、ブッダが生涯を通じて説いた法（理法）と考えるのが妥当であろう。というのは、ブッダの説いた、修行僧たちが繁栄するための七つの法の第三の法は次のようなものだからである。

「修行僧たちが、未来の世に、未だ定められていないことを定めず、すでに定められたことを破らず、すでに定められたとおりの戒律をたもって実践するならば、修行僧らよ、修行僧たちに繁栄が期待され、衰亡は無いであろう」

ここでブッダは、修行僧たちが繁栄するためには「戒律」を保ち、実践すべきであると説いている。つまり、ブッダは、民族や国家、僧団という人間の共同体を維持・発展させるには「法」が大切であることを説いたのである。ブッダが「法」をきわめて重視していたことは、ブッダが最後の旅の行く先々で、数多くの「法に関する講話」をしていたことからも読み取ることができる。

それでは、ブッダの「法」とは何か。『ブッダの人と思想』には、『サンユッタ・ニカーヤ』からの引用として次のように記されている。[30]

「わたくしはこの法（ダンマ）をさとったのだ。わたくしはその法を尊敬し、敬い、たよっているようにしよう」と。

そのとき世界の主、梵天は、……梵天界から消え失せて、尊師の前にあらわれた。……尊師に向かって合掌して、このようにいった、

――「尊師よ。そのとおりです。幸ある人よ。そのとおりです。尊い人よ。過去世に、拝まれる人、正しくさとった人、尊師であった方々も、ただ〈法〉のみを尊敬し、敬い、たよっておられました。また未来世において、……現在世において、拝まれる人、正しくさとった人である尊師もまた、ただ〈法〉のみを尊敬し、敬い、たよっておられませ」と。

これは、ブッダがアジャパーラ榕樹下で瞑想に入っていたとき、心に浮かんできた思いであるから、「法」とはまさにブッダの悟りに他ならないのである。そしてブッダは、生涯を通じて自らの悟りの境地＝法を説き続けた。

（2）法をよりどころにせよ

ブッダ最後の旅も終りに近づいていたときのことである。アーナンダから最後の説法を懇請されたブッダは、次のように説法した。[31]

「アーナンダよ。修行僧たちはわたくしに何を期待するのであるか？　わたくしは内外の隔てなしに（ことごとく）理法を説いた」

「それ故に、この世で自らを島とし、自らをたよりとして、他人をたよりとせず、法を島とし、法をよりどころとして、他のものをよりどころとせずにあれ」

アーナンダや弟子たちは、ブッダが亡くなった後、どのようにして生きていったらよいのか、いたく動揺していた。これに対してブッダ

は、他人をたよるな、他のものをよりどころとするな、自分をたよりとせよ、法をよりどころとせよ、と諭したのである。根本は、自分であり、法である。

ブッダは、最後の力をふりしぼって、自らが説いた法を実践せよと弟子たちに訴えているように思われる。この法の実践について、中村元博士は『古代インド』の中で次のように記している。[32]

道はただ理法の実践に――無我

ゴータマは二律背反におちいるような形而上学説をできるかぎり排除して、真実の実践的認識を教えようとした。人間には、いつ、いかなるばあいにも、守るべき理法（ダルマ）がある。それは人間としてのあるべきすがたである。これを実践し実現しなければならない。

世間の人々は自己というものを見失っている。多くの世人は社会的地位や財産を自己とみなしているが、これらは自己から失われるものであるから、真実の自己ではない。最愛の家族といえども、死ぬときには別れなければならないから、自己とはみなしえない。肉体的・精神的機能も真実の自己ではない。当時のインドの哲人は、自己（アートマン）を一種の形而上学的実体とみなしたが、それも誤っている。

では真実の自己はいかなるものであるか。それは客体的なものとしてはとらえられない。それは見ようとしても見えないものである。ただ、人々が人間としての理法（ダルマ）の実践につとめるときに、真実の自己が実現されるのである。孤立した実体としての自己というようなものは存在しえない。ここにいわゆる無我説がひらかれているのである。

ブッダの滅後二五〇〇年近くを経て今なお仏教が生きているのは、ここで中村博士が指摘しているように、ブッダ自ら、守るべき理法＝人間としてのあるべき姿を実践・実現したからであり、その後も人間としての理法を実践・実現する人々がいるからである。

ブッダの教えは、形而上学ではなくして、真実の自己を実現する実践の道である。ブッダが説いた繁栄のための法は、こういう観点から現代的意義を見出すべきである。

（3）ブッダの法の倫理的意義

ブッダが入滅を間近に控えていたとき、スバッダという遍歴行者がブッダを訪ねてきた。侍者のアーナンダは、衰弱したブッダを気遣って三たび面会を断わったが、これを聞いていたブッダは面会を許して、スバッダに次のように法を説いた。[33]これは、ブッダ最後の説法、そしてスバッダはブッダ最後の直弟子となった。

「スバッダよ。わたしは二十九歳で、何かしら善を求めて出家した。スバッダよ。わたしは出家してから五十年余となった。正理と法の領域のみを歩んで来た。これ以外には〈道の人〉なるものも存在しない」

このブッダ最後の短い説法の中に、「善」「正」「理」「法」「道」という言葉が出てきていることに注目しておきたい。つまり、これらの言葉に象徴されているように、ブッダの法は

・何が善くて、何が悪いのか
・何が正しくて、何が正しくないのか
・何が理にかなっていて、何が理にかなっていないのか
・何が道にかなっていて、何が道にかなっていないのか

という道徳性・倫理性を帯びている。

既述のようにブッダは、ヴァッジ人は法を守り、法に従って行動し、しっかりと国を治めている、したがって侵略は成功しない、とアジャータサットゥ国王を諫めた。このヴァッジ人の法とは、道徳的・倫理的に正当化される法であらねばならないのである。ブッダならびにその後展開された仏教思想の法は、道徳・倫理と分かち難く結びついている。三枝充悳博士による「法」についての次の解説は、それを如実に示している。[34]

法はパーリ語のダンマ、サンスクリット語のダルマの訳語であり、その語根のドゥァルは「担う、保つ」を意味するから、ダルマ（ダンマ）は、支え、礎え、きまり、かた、規範、慣例、義務、秩序、宇宙の原理、善、徳、普遍的真理、法律、倫理、宗教、教え一般などのきわめて広範囲の意味と用例がインドでは知られ、その使用はインド全体に遍満する。やや後代には仏教独自の用法として「もの」を指示する例もある。

ここにみられるように、ダルマには、①きまり、規範、慣例、法律、②善、徳、倫理、③宇宙の原理、普遍的真理、④宗教、教えという意味が包含されている。道徳性・倫理性を欠いたダルマはないのである。そしてブッダは、繁栄のための第三の法の中で、

・定められたことを破らない
・法に従って行動する

ことを説いた。これは、現代流に解すると、「法律・規則を守る」こと、つまり順法精神であり、企業倫理からみると「コンプライアンス」ということである。

ここに我々は、企業倫理を確立する上で仏教が果たす重要な意義を見出すことができる。つまり、企業や社会、国家を維持していくためには「法」が必要であり、法には①法律・規則という側面と、②善・徳・倫理という側面がある。法律・規則を破るということは、悪であり、不徳であり、非倫理的である。法律・規則を守るということは、善であり、有徳であり、倫理的である。

企業不祥事とは、まさに定められた法律・規則を破る行為に他ならない。それ故に、非倫理的・反道徳的行為なのである。

（4）真の人間道を求めて

ブッダは、ヴァッジ人が定められたことを破らず、法に従って行動する限り、ヴァッジ人には繁栄が期待され、衰亡することはないであ

ろうと説いた。この教えによってブッダは、部族や氏族、国家などの人間共同体を支えるためには法が必要である、との考えを示したのである。

一方、松下幸之助は、人類の誕生以来、人間が家族→小集団→大集団→民族・国家へと共同生活を拡大していった過程を歴史的に分析し、政治や宗教、経済、教育、学問、道徳、倫理が生まれてきた背景を考察している。その集大成ともいうべき著作が『人間を考える――新しい人間観の提唱・真の人間道を求めて』である。人間は社会的動物といわれるように、小は家庭から大は国家に至るまで、さまざまな形で共同生活を営んでいるが、松下幸之助によれば、人間は常にその共同生活を高め、発展させようとしている。いいかえれば、よりよき共同生活をめざしている。そして、その共同生活の秩序を保つため、さまざまな工夫をしてきた。『人間を考える』には次のように記されている。[35]

人間の共同生活においては、力の面の秩序を保つための政治と精神の面での秩序を保つための宗教というものが大きな柱になっています。そのほかにも共同生活を物資の面で支えていく経済活動というものも人間にとって欠かすことができません。さらに、個々の人間を磨き高めたり、あるいは人間の情操をゆたかにするための、教育とか学問、道徳、芸術、思想などといったきわめて大切なものもあります。

ここで松下幸之助が共同生活で人間を磨き高め、情操をゆたかにするものとして、道徳の大切さに言及していることに注目したい。さらに幸之助の考え方を続けてみる。[36]

よりよき共同生活を生み出すために政治があり、宗教がある。経済、教育、学問、芸術、道徳、またそれぞれの思想、みなしかりです。決して政治のために、経済のために人間があるわけではありません。人間のための政治、人間のための宗教、人間のための学問、教育、思想すべてそうでなくてはならないと思います。そういう意味で、権力や思想にとらわれることはもちろん、いかなるものにもとらわれるということはいけないわけで、これらにとらわれると、かえって共同生活の上に不幸をもたらすことになります。

松下幸之助はここで、政治、宗教、経済、教育、学問、芸術、道徳、思想はすべて人間のためにある、としている。道徳は、企業という共同生活の経営哲学、倫理を考える上できわめて重要である。

権力や思想にとらわれると共同生活の上に不幸をもたらす、という指摘も、経営者が心に銘ずべきことである。企業不祥事は、総じて経営者の権力志向から発生しているからだ。

それでは、共同生活の活動のあり方や施策の是非は、何をもって判断すればよいのか。松下幸之助は、人間の歴史や、釈迦、キリストのような世界的・人類的な先哲諸聖、あるいは聖徳太子、道元、親鸞、日蓮のような日本の宗教家、神道などの叡知に学んで、真の「人間道」

を提唱した。それが、次に記す「新しい人間道の提唱」である。[37]

人間には、万物の王者としての偉大な天命がある。かかる天命の自覚に立っていっさいのものを支配活用しつつ、よりよき共同生活を生み出す道が、すなわち人間道である。

人間道は、人間をして真に人間たらしめ、万物をして真に万物たらしめる道である。

それは、人間万物いっさいをあるがままにみとめ、容認するところからはじまる。すなわち、人も物も森羅万象すべては、自然の摂理によって存在しているのであって、一人一物たりともこれを否認し、排除してはならない。そこに人間道の基がある。

そのあるがままの容認の上に立って、いっさいのものの天与の使命、特質を見きわめつつ、自然の理法に則して適切な処置、処遇を行ない、すべてを生かしていくところに人間道の本義がある。この処置、処遇をあやまたず進めていくことこそ、王者たる人間共通の尊い責務である。

かかる人間道は、豊かな礼の精神と衆知にもとづくことによってはじめて、円滑により正しく実現される。すなわち、つねに礼の精神に根ざし衆知を生かしつつ、いっさいを容認し適切な処遇を行なっていくところから、万人万物の共存共栄の姿が共同生活の各面におのずと生み出されてくるのである。

政治、経済、教育、文化その他、物心両面にわたる人間の諸活動はすべて、この人間道にもとづいて力づよく実践していかなければならない。そこから、いっさいのものが、そのときどきに応じ、そのところを得て、すべてが調和のもとに生かされ、共同生活全体の発展と向上が日に新たに創成されるのである。

まさに人間道こそ人間の偉大な天命を如実に発揮させる大道である。ここに新しい人間道を提唱するゆえんである。

私は先に、ブッダが繁栄のための第三の法で「ダルマ」（法・理法）を説いたことに言及した。松下幸之助も人類の繁栄、平和、幸福のための規範として、自然の「理法」に則した人間道を提唱したのである。

松下幸之助によれば、物事の是非善悪、何が正しくて、何が正しくないかは、「人間道」に照らして判断されなければならない。

人間同士、団体同士、国家同士の行動も、人間道に根ざすものでなければならない。

政治や諸制度、法律・規則の基本は、人間道に基づいたものに改めていかなければならない。

価値観がきわめて多様化している現代社会にあっては、どういう政治・経済・経営・教育が望ましいか、意見は全く分かれている。こういう時代こそ、よりよい共同生活を実践するための規範が必要で、松下幸之助が提唱した人間道はその指針となるものである。

次章では、鈴木正三の職業倫理と松下幸之助の産業人としての使命について考察する。

鈴木正三は江戸時代初期の禅僧である。日本で初めて武士と農民、

職人、商人の職業倫理を説いた思想家としての評価が確立している。その現代的意義はどこにあるのか。松下幸之助の経営哲学との間にどのような関連性を見出すことができるのか。新しい視点から松下幸之助の経営哲学に迫ってみる。

《引用文献》

（1）『ＬＩＦＥ』（ライフ）、一九六四年九月一一日号
（2）同前一〇八頁
（3）同前一一二頁
（4）松下幸之助『道をひらく』ＰＨＰ研究所、一九六八年、四六～四七頁
（5）江口克彦『心はいつもここにある』ＰＨＰ研究所、一九九一年、三～四頁
（6）江口克彦『松下幸之助　散策・哲学の庭』ＰＨＰ研究所、一九九九年、三五～三六頁
（7）『ブッダ最後の旅』中村元訳、岩波書店、一九八〇年、五二～五三頁
（8）同前五三頁
（9）宮元啓一『仏教の倫理思想』講談社、二〇〇六年、二一頁
（10）前出『ブッダ最後の旅』一一頁
（11）同前一二～一五頁
（12）中村元『古代インド』講談社、二〇〇四年、一〇五頁
（13）保坂俊司『国家と宗教』光文社、二〇〇六年、九九頁
（14）前出『古代インド』一五〇～一五一頁
（15）同前一〇六頁
（16）前出『ブッダ最後の旅』一八七頁
（17）同前一八～一九頁
（18）松下幸之助『人間を考える――新しい人間観の提唱・真の人間道を求めて』ＰＨＰ研究所、一九九五年、六六頁
（19）同前三三頁
（20）同前六六～六七頁
（21）同前七三頁
（22）宇井伯壽『佛教汎論』岩波書店、一九四七年、三八頁
（23）前出『ブッダ最後の旅』一〇七頁
（24）織田得能『織田佛教大辞典』大藏出版、一九五四年、一五五一頁
（25）前出『佛教汎論』一七頁
（26）同前二七頁
（27）松下幸之助『ＰＨＰのことば』ＰＨＰ研究所、一九七五年、六二頁
（28）同前六四頁
（29）同前六三頁
（30）中村元・田辺祥二『ブッダの人と思想』日本放送出版協会、一九九八年、五三～五四頁
（31）前出『ブッダ最後の旅』六二～六三頁
（32）前出『古代インド』一四六～一四七頁
（33）前出『ブッダ最後の旅』一五〇～一五一頁
（34）三枝充悳『仏教入門』岩波書店、一九九〇年、一〇四頁
（35）前出『人間を考える――新しい人間観の提唱・真の人間道を求めて』一〇〇頁
（36）同前一〇一頁
（37）同前一二〇～一二三頁

《参考文献》（引用文献を除く）

・松下幸之助『「新装版」道は無限にある』ＰＨＰ研究所、二〇〇七年
・松下幸之助『素直な心になるために』ＰＨＰ研究所、二〇〇四年

・松下幸之助『物の見方 考え方』ＰＨＰ研究所、一九八六年
・辛島昇・奈良康明『インドの顔』生活の世界歴史5、河出書房新社、一九九一年
・佐藤圭四郎『古代インド』世界の歴史6、河出書房新社、一九八九年
・丸山勇『カラー版　ブッダの旅』岩波書店、二〇〇七年
・白川静・中村元・梅棹忠夫・梅原猛『私の履歴書　知の越境者』日本経済新聞出版社、二〇〇七年
・渡辺照宏『仏教　第二版』岩波書店、一九七四年

（みずの・たかのり　水野塾塾長・国際エコノミスト）